

尾張平野における中世井戸の構造とその変遷に関する覚書

北村和宏

1 はじめに

近年、尾張平野各所において発掘調査が進展するにつれて、これまで判然としなかった尾張平野の中世集落の具体的様相が次第に明らかになりつつある。こうした中世集落跡で数多く検出される遺構のひとつに「井戸」遺構（以下、井戸）がある。この小稿では、尾張平野（調査例が少ない犬山扇状地、段丘、洪積台地上を除く）検出の中世の井戸を取り上げ、その構造および変遷と画期について、若干の整理・検討を加えてみようとするものである⁽¹⁾。

なお、「中世」の井戸を問題にする場合、その前後の時期の井戸との比較・検討は欠くことのできない作業である。しかしながら管見の限りでは、考古学上の古代末から中世初に位置付けられる灰釉陶器猿投窯編年の折戸第53号窯式～百代寺窯式および南部系山茶碗編年の第3型式の時期の検出例を見出し得ない。したがってここでは検討の対象とする年代については、所謂「中世陶器」の出現直後の南部系山茶碗編年の第4型式をその上限年代とし、下限については、中世末～近世初に位置づけられる安土桃山時代を含む美濃・瀬戸窯編年の大窯期までとする⁽²⁾。

2 井戸の分類

井戸構造の相違に着目した分類については、これまで、宇野隆夫氏をはじめとする先学諸氏によっていくつかの体系的な試案が提示されている（宇野隆夫1982ほか）。呼称法等々の細部はともかくとして、分類の枠組みについては、概ね一致しているように見受けられる。ここでは、小都隆氏の井戸側部の相違に着目した草戸千軒遺跡の中世井戸についての分類案（小都隆1979）をもとに、

若干の私見を加えて尾張平野の井戸を形式分類する。特に大きな変更点は、小都氏が「〇〇〇型」と表記するのに対して、筆者はこれを「形式分類」と理解し、「〇〇〇式（形式）井戸」と置換して表記したことである。そのほか呼称法を一部改変してもちいている（第1表）。

尾張平野で検出されている中世の井戸を、円形曲物側式井戸、方形縦板組隅柱横棧式井戸、方形縦板組横棧式井戸、方形横板組式井戸、円形桶側井戸、石組側式井戸、陶器使用式井戸の7つに分類し、これらに該当しないものについては、便宜的にその他として一括しておく。この場合、特に問題となるのが「素掘り式井戸」の扱いである。いま対象としている尾張平野の低地では比較的湧水層が高く、発掘調査の経験を踏まえるならば、構造物のない「素掘り」のままで、井戸として機能しえたか疑問がある。そのため、掘削が湧水層まで達している井戸状遺構については、ここでは形式設定を見合わせた。

以下、井戸側部の構造の相違による各形式について概述する。

円形曲物側式井戸

底板を抜いた円形の曲物⁽³⁾を積み上げて、井戸側とする形式の井戸。掘形内に曲物が1段ないし2段ほどのみ遺存する例が多い。これらについては、例えば方形縦板組横棧式井戸が廃棄された際に井戸側部が抜き取られ井筒（水溜）部として用いられた曲物が結果的に残存したものを含む可能性がある。しかしながら、これらを区別することは事実上困難であり、ここでは便宜的に円形曲物側式井戸に一括しておくこととする。代表的なものとして、大毛沖遺跡（一宮市）の93G区SE05（文12）があげられる。

分類	小都隆氏の分類案（小都隆1979）	宇野隆夫氏の分類案（宇野隆夫1982）
円形曲物側式井戸	円形曲物型	BⅧ類曲物積上げ井戸
方形縦板組隅柱横棧式井戸	方形隅柱横棧型	BⅣ類縦板組隅柱横棧どめ井戸
方形縦板組横棧式井戸	方形横棧型	BⅢ類縦板組横棧どめ井戸
方形横板組式井戸	…	(BⅥ類横板井籠組井戸)
円形桶側式井戸	円形桶側型	BⅨ類桶積上げ井戸
石組側式井戸	石組井側	(C類石組井戸)
陶器使用式井戸	陶器井側	(DⅡ類土器組井戸)

第1表 分類名対照表

方形縦板組隅柱横棧式井戸

四隅に配した隅柱に柄を穿って横棧を渡し、その外側に板をたて並べて側板とした構造の井戸。側板は部分的に二重・三重に重ねられる例が多い。井筒を有するものと有しないものとが存するが、有する場合は、底板を抜いた円形の曲物が用いられている。代表的な例として、儀長正楽寺（稲沢市）SE01（文13）、森南遺跡（海部郡甚目寺町）SE05（文15）があげられる。

方形縦板組横棧式井戸

方形に組んだ横棧で、たて並べた側板を支える構造の井戸。側板下端部に、ひときわ大型の角・板材を方形に組んだ木組を設置したのち側板をたて並べて横棧でとめたもの（A類）と、こうした方形の木組を特に設けないもの（B類）とがある。また他の地域のこの種の井戸には、上の横棧の落下・ズレを防止するために上下の横棧間の四隅に支柱（束木）を入れるものと入れないものとがある。管見の限りでは尾張平野においては後者の例を見い出しえないので、この相違による細別はここでは行わない。なお四隅に支柱を入れた場合、外観上は、方形縦板組隅柱横棧式井戸に似る。井筒については、これを設けるものが圧倒的に多く、その殆どの場合、井筒には底板を抜いた円形の曲物が用いられるほか、極稀に常滑窯産の甕が用いられた例がある⁽⁴⁾。方形縦板組横棧式井戸Aの代表例としては、阿弥陀寺遺跡（海部

郡甚目寺町）SE1018（文3）、清洲城下町遺跡（西春日井郡清洲町）Ⅱ-SE31⁽⁵⁾（文7）が、方形縦板組横棧式井戸Bとしては清洲城下町遺跡Ⅱ-SE33（文7）、下津城跡（稲沢市）第5地点第4面SE04（文17）があげられる。

方形横板組式井戸

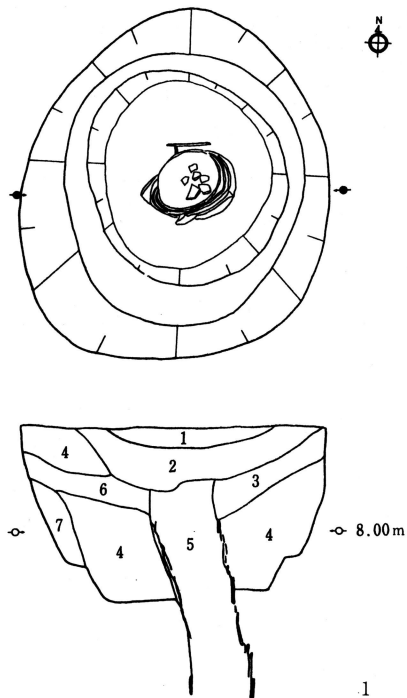
幅広の板材を横長に用いて方形に組んだ木枠を積み上げて井戸側とする井戸。この板材の仕口は柄組となっている。例数は少ないが、土田遺跡（西春日井郡清洲町）SE06（文1）、清洲城下町遺跡Ⅳ-SE3004（文10）があげられる。

円形桶側式井戸

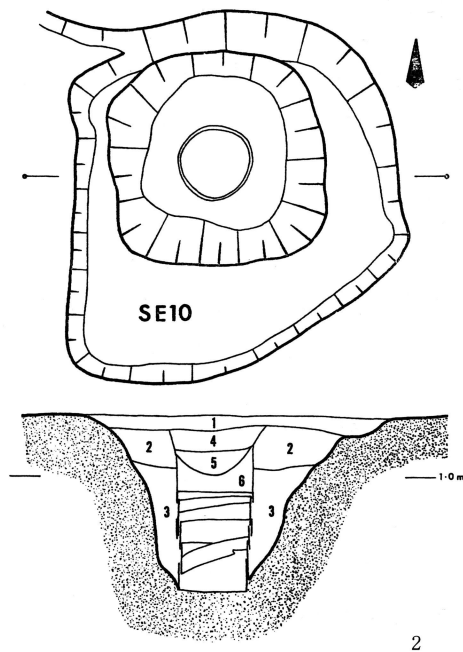
底板を抜いた桶を逆さまにして積み上げて井戸側とした井戸。清洲城下町遺跡で検出された桶を検討した鈴木正貴氏によれば、最下段の桶の下端部（正位にした場合の口縁部）の先端は鋭利に加工し、地面に突きささりやすくしてあるのに対して、二段目以降の桶は、下端部の内面（正位の口縁部内面）が薄く削られ、重ね合せやすくするための造作が加えられているという。代表的な例としては、清洲城下町遺跡Ⅰ-SE120（文4）、朝日西遺跡（西春日井郡清洲町）SE09（文8）があげられる。

石組側式井戸

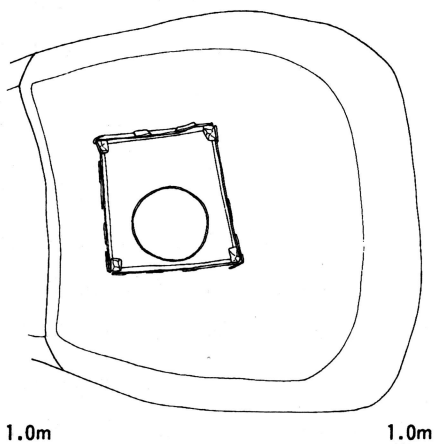
石を組んで井戸側部とした井戸。例数が少なく細かな分類をするに至っていない。例としては、井筒部に底を抜いた桶を用いた清洲城下町遺跡で



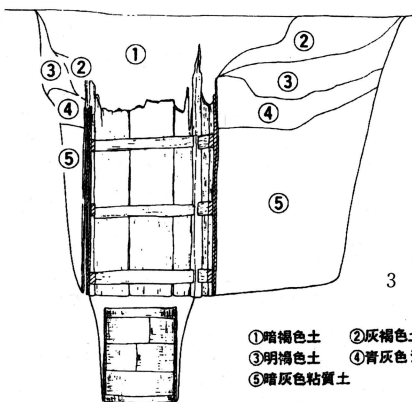
1. 黄褐色砂質シルト
2. にぶい黄粘質シルト
3. 黒褐色粘質シルト
4. 暗灰黄色砂質シルト
5. 灰色粘質シルト
6. オリーブ褐砂質シルト
7. オリーブ褐砂質シルト



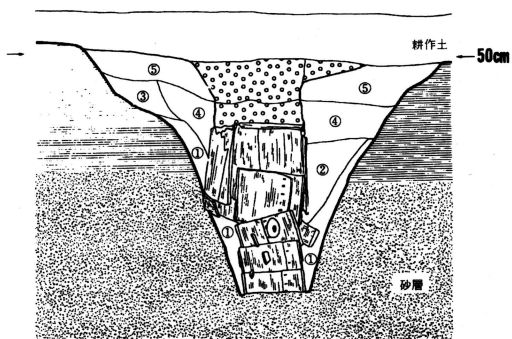
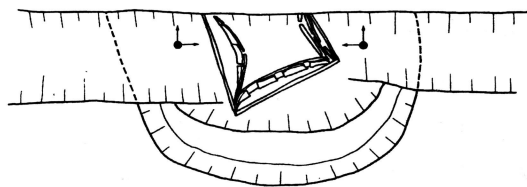
- 1 灰褐色土
- 2 暗灰褐色土，黄色土斑入
- 3 暗灰褐色粘質土
- 4 暗灰褐色土
- 5 暗灰褐色粘質土
- 6 暗灰褐色粘土



1.0m 1.0m



- ①暗褐色土
- ②灰褐色土混り褐色砂質土
- ③明褐色土
- ④青灰色シルト
- ⑤暗灰色粘質土



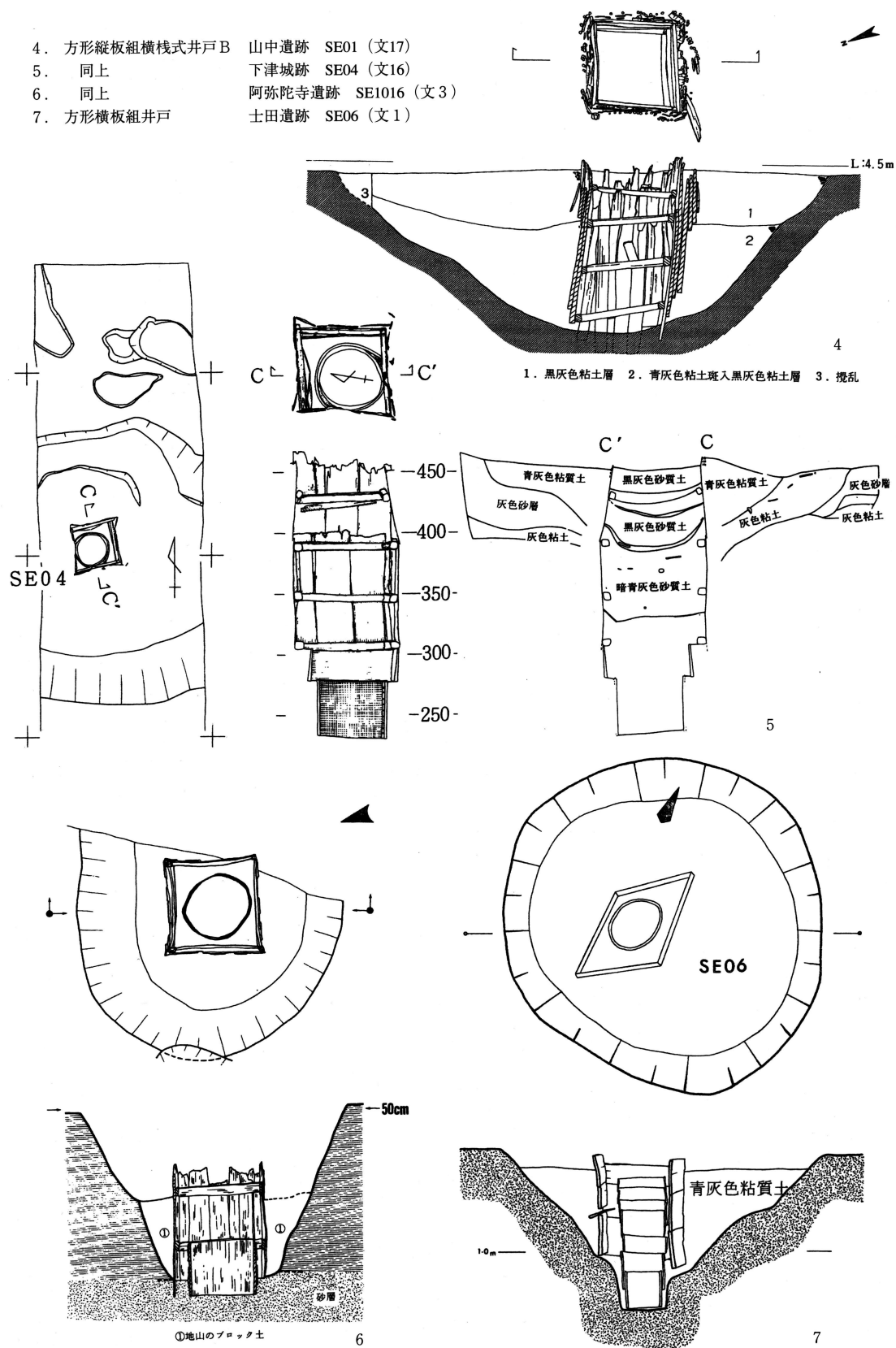
- ①明黒灰色シルト
- ②暗黒灰色シルト
- ③明茶褐色砂質シルト
- ④暗黒灰色シルト
- ⑤暗茶褐色砂質シルト

1. 円形曲物積上げ式井戸
2. 同上
3. 方形縦板組隔柱横棧式井戸
4. 方形縦板組横棧式井戸A

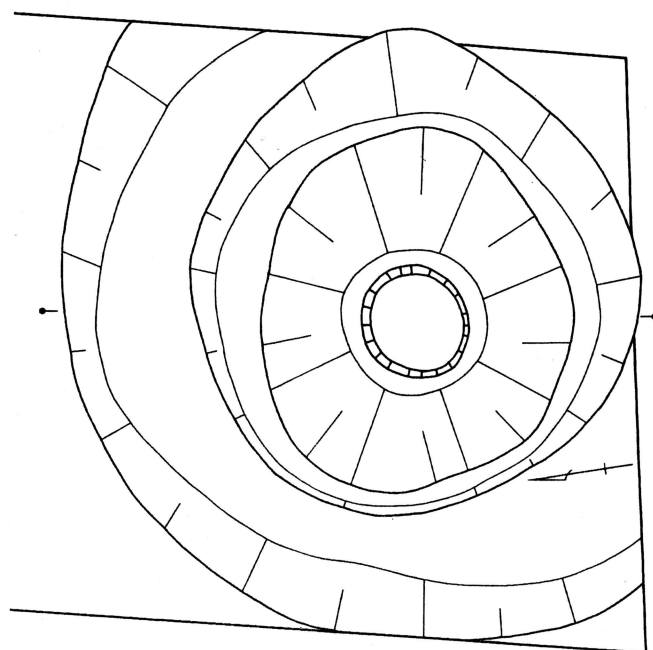
大毛沖遺跡 93GSE05 (文12)
 土田遺跡 SE10 (文1)
 森南遺跡 SE04 (文15)
 阿弥陀寺遺跡 SE1018 (文3)

第1図 井戸実測図(1) (1:50)

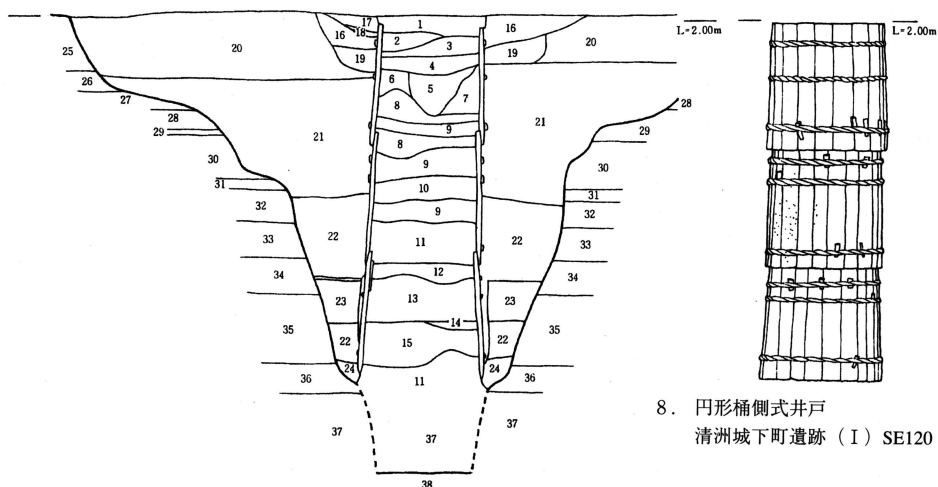
- | | |
|----------------|--------------------|
| 4. 方形縦板組横棧式井戸B | 山中遺跡 SE01 (文17) |
| 5. 同上 | 下津城跡 SE04 (文16) |
| 6. 同上 | 阿弥陀寺遺跡 SE1016 (文3) |
| 7. 方形横板組井戸 | 士田遺跡 SE06 (文1) |



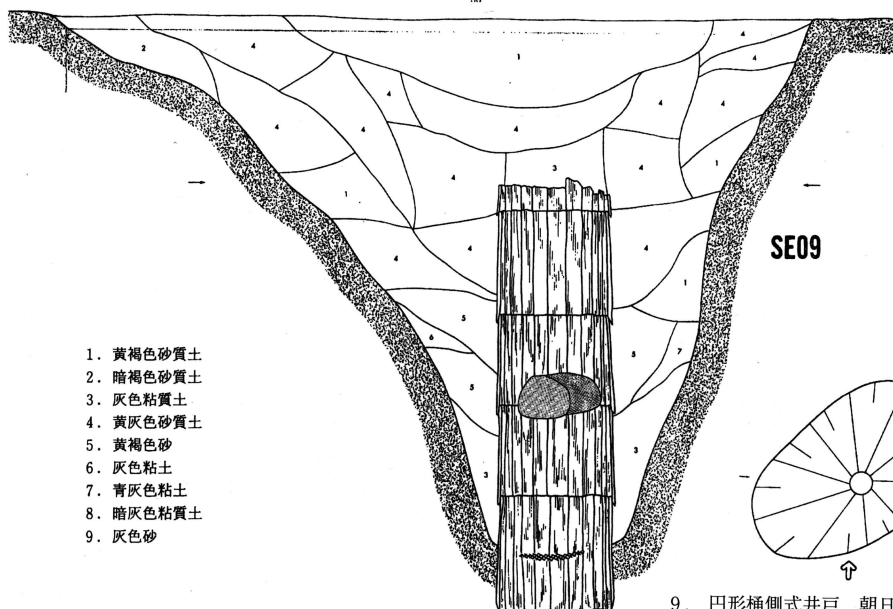
第2図 井戸実測図(2) (1:50)



- 1 灰黄色砂質土
- 2 灰色砂質土(灰黄色粘土混入)
- 3 灰色砂質土
- 4 暗褐色砂質土
- 5 暗褐色砂質土
- 6 暗褐色砂質土(灰色砂混入)
- 7 灰色砂
- 8 灰青色粘土(暗褐色粘土混入)
- 9 黑灰色粘土(灰色砂混入)
- 10 黑灰色粘土(褐色粘土混入)
- 11 黑灰色粘土(灰白色砂混入)
- 12 灰色粘土(灰白色砂混入)
- 13 暗绿色粘土
- 14 暗绿色砂
- 15 灰白色砂
- 16 淡灰色砂質土
- 17 灰色砂質土
- 18 黄色シルト
- 19 灰色粘質土
- 20 灰黑色粘土(灰色砂質土混入)
- 21 灰黑色粘土(灰青色粘土混入)
- 22 灰黑色粘土(灰青色粘土混入)
- 23 灰青色粘土(暗褐色粘土混入)
- 24 暗青色粘土
- 25 灰褐色シルト
- 26 灰青色粘質土
- 27 灰色砂質土
- 28 灰色粘土
- 29 灰青色粘土
- 30 暗灰褐色粘土
- 31 淡褐色粘土
- 32 黑褐色粘土
- 33 淡褐色粘土
- 34 黑色粘土
- 35 灰青色粘土
- 36 黑色粘土(灰褐色粘土混入)
- 37 黑色粘土(砂混入)
- 38 灰白色粗砂



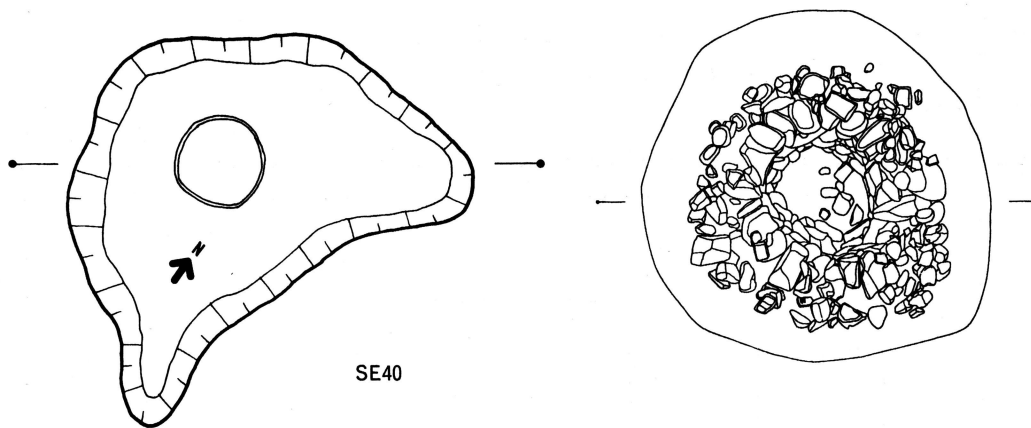
8. 円形桶側式井戸
清洲城下町遺跡 (I) SE120 (文4)



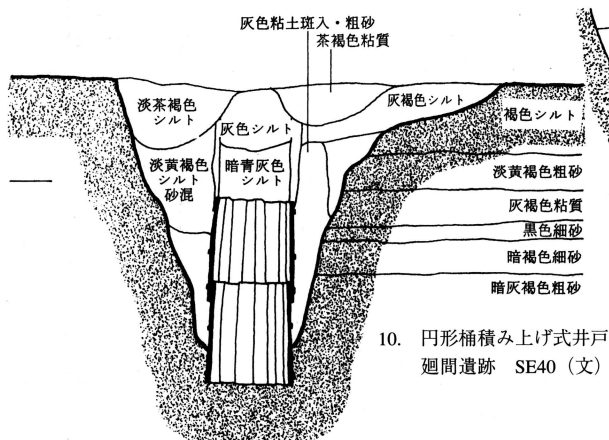
1. 黄褐色砂質土
2. 暗褐色砂質土
3. 灰色粘質土
4. 黄灰色砂質土
5. 黄褐色砂
6. 灰色粘土
7. 青灰色粘土
8. 暗灰色粘質土
9. 灰色砂

9. 円形桶側式井戸 朝日西遺跡 SE09 (文8)

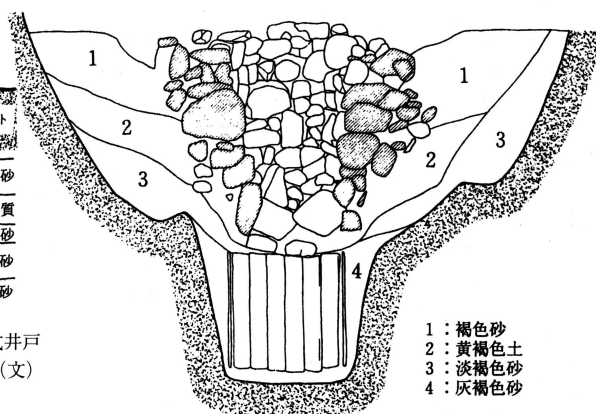
第3図 井戸実測図(3) (1:50)



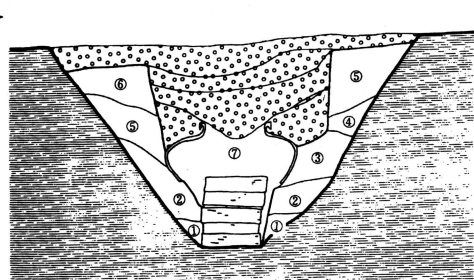
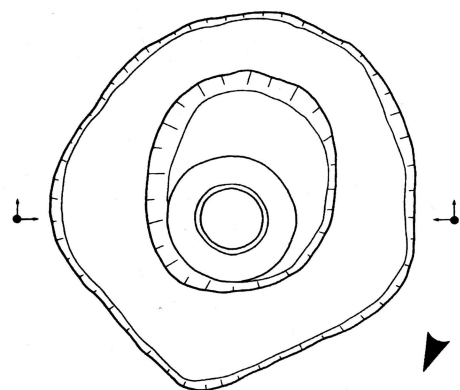
SE40



10. 円形桶積み上げ式井戸
廻間遺跡 SE40 (文)

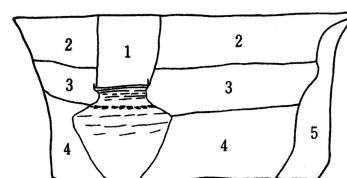
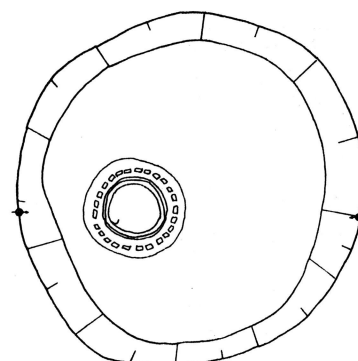


11. 石組側式井戸
清洲城下町遺跡Ⅳ SE7012 (文10)



- ① 灰褐色シルト
- ② 暗灰色シルト + 灰色シルト
- ③ 灰色シルト
- ④ 黄灰色シルト
- ⑤ 暗褐色粘土 + 黄灰色シルト
- ⑥ 暗褐色粘土 + 黄灰色シルトブロック
- ⑦ 暗灰褐色シルト

12. 陶器使用式井戸
阿弥陀寺遺跡 SE1014 (文3)



- 1. 灰色粘質シルト
- 2. 灰色粘質シルト、灰白色シルトブロック混
- 3. 灰色粘質シルト、灰色粘質シルトブロック混
- 4. 灰色粘質シルト、灰色粘質シルトブロック混
- 5. 灰白色シルト

13. 陶器使用式井戸
大毛沖遺跡 93ASK04 (文12)

第4図 井戸実測図(4) (1:50)

煮沸具 の編年 (北村 1996)	山茶碗 南部系 (藤沢1982)	山茶碗 北部系 (藤沢1990)	円形曲物 側式井戸	方形縦板組隅 柱横式井戸	方形縦板組 横式井戸	方形横板組式井戸	円形桶側式井戸	石組側式井戸	陶器使用式井戸
I-1	第4型式		土田 SE07						
I-2	第5型式		大毛沖93GSE05 土田 II SE05 儀長正楽寺SE07	儀長正楽寺SE02					
I-3	第6型式		廻間SE35 廻間SE31 土田 II SE04 大淵SE04 山中SE02		朝日西SE55 堀之内花ノ木SE31	清洲城下町 IV SE3004			
II-1	第7型式	IV期	清林寺SE01	儀長正楽寺SE01					大毛沖94ASK04
II-2	第7・8型式	V期	土田SE02 阿弥陀寺SE1001		清洲城下町 I SE110 清洲城下町 II SE31 清洲城下町 II SE33 土田 II SE01 阿弥陀寺SE1016				阿弥陀寺SE1014
II-3		VI期	阿弥陀寺SE1012	儀長正楽寺SE04	阿弥陀寺SE1018 大毛沖94ISE02 山中SE01 儀長正楽寺SE08				
II-4		VII期	廻間SE33	森南SE04					
		VIII期			阿弥陀寺SE1002 森南SE07				
		IX期							
III-1	古瀬戸後期IV期	X期	清洲城下町編年 (鈴木1995)				(清洲城下町 IV SE3002)		
			I-1						
III-2	大窯 I		I-2				清洲城下町 IV SE4060 清洲城下町 IV SE4081 清洲城下町 IV SE8001		
III-3	大窯 II		II-1				(清洲城下町 IV SE6020)		
	大窯 III		II-2				清洲城下町 IV SE4018 清洲城下町 IV SE4059 清洲城下町 IV SE4078 清洲城下町 IV SE6004 清洲城下町 IV SE6016 清洲城下町 IV SE6038 清洲城下町 IV SE6063		
IV-1							清洲城下町 IV SE1002 清洲城下町 IV SE4001		
	大窯 IV		III-1				清洲城下町 IV SE1002 清洲城下町 IV SE4001		
IV-2	大窯 V		III-2				清洲城下町 IV SE6014 清洲城下町 IV SE6040 清洲城下町 IV SE8002	清洲城下町 IV SE7012	
	(藤沢1986)								

第2表 井戸構造の変遷

IV-SE7012 (文10) があげられる。

陶器使用式井戸

井戸側の一部に陶器を用いた井戸。陶器は一部に用いられているに過ぎずこの点で形式設定上いささか問題が残る。例数は極めて少なく、阿弥陀寺遺跡SE1014 (文3)、大毛沖遺跡93区SK04 (文12) があげられる。

その他

上記の分類に属さないものが散見される。その多くは、遺存状況が悪くそれゆえにその帰属が判然としないものであるが、それ以外で注目すべきものを二つ記して、後日の形式設定に備えることとしたい。一つは、竹材を用いて井戸側を作り上げている一群である。朝日西遺跡 (文8) において「方形縦板組横棧式井戸」と「方形縦板組横棧式井戸」を模して竹材で作った井戸が検出されている (SE73・SE86)。構造的には何ら木製井戸側と変わるところがない。竹材を用いることがあるのが朝日西遺跡の特色なのか、あるいはこの時期の一構造形式として存したものなのか、はたまた偶然の所産なのか、いましばらく資料の蓄積をまちたい。もうひとつは、横棧を持たないいわば「方形縦板組式井戸」である。廻間遺跡 (西春日井郡清洲町) (文2) で一例検出されている (SE32)。これまた今しばらく資料の蓄積をまちたい。

3 井戸構造の消長と画期

消長

第2表は、尾張平野で検出された中世の井戸のうち、出土遺物からある程度年代が判明する主なものを取り上げて、上記の形式分類ごとに、出土遺物の型式に基づいて整理したものである。これより、各形式の消長は、以下のように整理できる。

円形曲物側式井戸：既述のように、この円形曲物

側式井戸としたものについては、例えば方形縦板組横棧式井戸などの井筒部の残欠ではないかと思われるものを含む可能性がある。がしかし、このように表示して見ると、南部系山茶碗第4～6型式のものが目立ち、後述する方形縦板組横棧式井戸の盛行期に先行していることがうかがわれる。すなわち、南部系山茶碗第4～6型式の時期に井戸側部の抜き取りが徹底していたと見なさない限り、この円形曲物側式井戸が当該期に盛行していたことを認めざるを得ないと推察する。

方形縦板組隅柱横棧式井戸：例数が極端に少ないが、南部系山茶碗第5型式～北部系山茶碗Ⅶ期までみられる。

方形縦板組横棧式井戸：南部系山茶碗第6型式から北部系山茶碗Ⅷ期の時期のものがみられる。例数は北部系山茶碗Ⅴ・Ⅵ期のものが多い。なお、A類・B類について特に年代的差異などを見い出せない。

方形横板組式井戸：例数が極端に少なく、南部系山茶碗第6型式のものがみられるに過ぎない。そのほか、図示した土田遺跡SE06について、報告書は、土田Ⅰ期 (南部系山茶碗第3～4型式に相当) に位置付けている。

円形桶側式井戸：清洲城下町遺跡の編年の第Ⅰ-1期、即ち北部系山茶碗期・瀬戸窯後期第Ⅳ小期より出現するが、例数が多くなるのは第Ⅰ-2期からである。その後、清洲城下町では江戸時代を通じて盛行することが知られている。

石組側式井戸：これまた例数が極端に少なく、現状では確定的なことは言えない。清洲城下町第Ⅲ-2期のものが一例認められるに過ぎない。

陶器使用式井戸：二例存す。ともに常滑窯産の甕と底板を抜いた円形曲物を組み合わせている。常滑窯編年の第5～6a型式の時期のものである。

画期

以上の整理をもとに、井戸構造の各形式の消長

を総括的に捉えると、井戸構造は、二つの画期を経て変遷していったものと推察される。第一の画期は、南部系山茶碗第7型式前後の時期に見られるもので、この時期を境に円形曲物側式井戸から方形縦板組横棧式井戸へと、井戸の主体が移って行くといったものである。ただ再三述べるようにこの円形曲物側式井戸については、その認定をめぐっていささか問題があるが、消長の項で述べたようにこの画期はある程度認められてよいと推考する。これに対して北部系山茶碗X期・瀬戸窯編年後期第4小期にみられる第二の画期は、円形曲物側式井戸、方形縦板組隅柱横棧式井戸、方形縦板組横棧式井戸、方形横板組式井戸といった各形式が姿を消し、円形桶側式井戸が出現・盛行するというもので、尾張平野における井戸構造が一変するという一大画期である。そして、この円形桶側式井戸が当該地において江戸時代を通じて石組側式井戸とともに盛行することから見て、この画期を近世的な井戸構造の確立として位置付けて大過あるまいと推察する。

なお、所謂古代から中世への移行期に大きな画期的段階があったであろうことは容易に推察されるところである。しかしながら既述のように肝心な当該期の検出例がなく、このことについて確定的なことは何ら言及しえない。いましばらく資料の出現を待ちたい。

以上、井戸構造の変遷に関して、二つの画期の存在を指摘した。最後に、これらの画期の歴史的な位置づけについて、若干言及しておきたい。

まず、この二つの画期が、はからずも筆者が先に試みた尾張平野における煮沸具の編年上の画期（北村和宏1996）と時期的にはほぼ一致を見えるという点に注目したい（第2表）。すなわち、この井戸構造の変遷上の画期は、ひとり井戸だけのものではなく、少なくとも煮沸具の変遷上の画期と時期的な一致をみることから見て、他の諸事象とも

関連・連動している可能性があることを示唆しているものと考えたい。とくに、第二の既存の形式が姿を消し、新たに円形桶側式井戸が出現し盛行するという画期は、あたかも煮沸具における伊勢型鍋（鍋A）・羽釜Aといった旧来の器種が消滅し、あらたに内耳鍋・羽釜B・茶釜型などといった新出器種が出現し、煮沸具の様相が一変するという画期と、その画期の内容までも一致していると見なすことができるのである。そして、土器編年に付与されている年代観が正しいとするならば第一の画期は、13世紀半ば過ぎのころであり、第二の画期は、15世紀後葉、すなわち「応仁の乱」直後ごろのこととなる。これらは、ともに文献史学で説かれる政治・文化史上の画期と軌を一にするもの（とくに後者）と推察される。

4 おわりに

以上、数項に分つて、尾張平野における中世井戸の概括的な変遷について私見を述べてきた。

「如何にあったか」という点に終始し、遺跡間あるいは周辺地域との関連の問題を含め、「何故にそう変遷していったのか」といった点にまで殆ど言及し得なかった。すべては今後の課題としたい。

註

- (1) 井戸遺構の研究については、すでに先学諸氏が種々の角度から考察されているところであり、尾張平野の井戸についても、遺跡単位の考察として長島広、鈴木正貴両氏の研究がある。長島氏は、朝日西遺跡（西春日井郡清洲町）検出の井戸について、「掘形」の形状および「内部構造（井戸側・井筒）」を取り上げて、その類型化を図られるとともに、井戸の「廃棄儀礼」の存在について言及されている（長島広1996）。鈴木正貴氏は、清洲城下町遺跡（同郡同町）検出の井戸について、主としてその「規模（掘形の大きさ・深さなど）」および城下町内における検出地点の相違注目し、井戸の規模の大小・構造差を居住者の「階層差」に結びつける視点を示されている（鈴木正貴1994）。また同氏は、井戸側として用いられた「桶」について詳細な分析を加えられている（鈴木正貴1989）。

(2) 遺物の年代観については、基本的には下記の文献の編年観にもとづく。

植崎彰一 1983「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』愛知県教育委員会

藤澤良祐 1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」(瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ) 瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐 1986「瀬戸大窯発掘調査報告」(瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ) 瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐 1990「付編1 瀬戸地方の北部系山茶碗窯」『尾呂』瀬戸市教育委員会

中野晴久 1994「赤羽・中野「生産地における編年について」(全国シンポジウム「常滑焼をおって」資料集) 日本福祉大学知多半島総合研究所

北村和宏 1996「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の編年」(年報平成7年度) (財)愛知県埋蔵文化財センター

なお、清洲城下町の遺構・遺物の編年については、下記の文献による。

鈴木正貴 1995「第Ⅸ章考察 第1節清洲城下町の遺物様相」(文11)

(3) 長岡京跡の曲物井戸を詳細に検討された渡辺誠氏は、こうした曲物の転用について、「これらの曲物は、底板を抜かれているのであるから転用であることは明らかであるが、このことが直ちに廃物利用を意味するとはいえない。井戸枠に使用するとき新品の底を抜いただけであろう。泉や井戸に対する古代人の信仰の深さを考えると廃物利用は考えられない。最初から底板をはずしていないのはむしろ耐久性の問題であろう」(渡辺誠1978)と述べられている。管見の限りでは、尾張平野の井戸枠に用いられている曲物は、いずれも底板の装着痕が認められるものである。

(4) 大毛沖遺跡(一宮市大字大毛)の97H調査区SE07がある。(文12)

(5) 清洲城下町遺跡については、これまでに6冊(～Ⅵ)の報告書が刊行されている。報告書ごとに遺構番号は付与されている。そこで井戸番号の混乱を避けるに遺構番号の前に報告書番号を入れた。

(6) こうした指摘は宇野隆夫氏によってすでになされている(宇野1982)ところである。

文献

宇野隆夫 1982「井戸考」『史林第65巻第5号』史学研究會

小都 隆 1979「草戸千軒の井戸」『考古学研究第26巻第3号』考古学研究會

鈴木正貴 1989「清洲城下町出土の井戸桶に関する考察」(年報 昭和63年度) (財)愛知県埋蔵文化財センター

鈴木正貴 1994「第7節井戸」(文1)

長島 広 1985「朝日西遺跡の井戸について」(年報 昭和60年度) (財)愛知県埋蔵文化財センター

渡辺 誠 1978「長岡京跡の曲物井戸記録保存の対象に関する一試論」『古代文化第30巻第8号』(財)古代学協会

報告書

文1 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1987『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集

文2 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

文3 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990『阿弥陀寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集

文4 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集

文5 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1991『大淵遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集

文6 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1991『土田遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集

文7 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1992『清洲城下町遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集

文8 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1992『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集

文9 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1994『堀之内花ノ木遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第52集

文10 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1994『清洲城下町遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集

文11 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1995『清洲城下町遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集

文12 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1996『大毛沖遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集

文13 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1996『儀長正楽寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第68集

文14 愛知県海部郡甚目寺町教育委員会 1983『四反畑遺跡 清林寺遺跡 甚目寺町内の出土遺物』甚目寺町文化財調査報告Ⅰ

文15 愛知県海部郡甚目寺町教育委員会 1990『森南遺跡発掘調査報告書』甚目寺町文化財調査報告Ⅱ

文16 一宮市教育委員会 1982『愛知県一宮市尾張病院山中遺跡発掘調査報告』一宮市文化財調査報告8

文17 新修稲沢市史編纂会編 1984『新修稲沢市史資料編六』新修稲沢市史編纂会事務局